

# 大学新入生における抑うつ傾向と 恥および罪悪感との関連

加曾利 岳美\*

This study developed a scale of the proneness to shame and guilt in first-year Japanese university students for investigating the relationship between proneness to depression, shame, and guilt in those students. Two hundred and fifty-six university students were evaluated with the following measures: 1) Shame and Guilt Proneness Rating Scale for Japanese University Students, 2) Beck Depression Inventory (BDI), 3) Egogram scales, and 4) Self-estimation scale. The *T*-test indicated that the proneness to shame was significantly higher in the highly depressed group, whereas the proneness to guilt exhibited no significant difference. Women reported significantly greater proneness to shame and guilt than men. Multiple regression analysis indicated that the best positive predictor of depression was a higher Adapted Child (AC) score for women in the Egogram. Higher Critical Parent (CP), lower Adult (A), and free Child (FC) scores predicted the proneness to shame in men, whereas lower FC and higher AC predicted that in women. A higher CP, NP and lower A predicted proneness to guilt in men, whereas a higher CP and lower A predicted that in women. The correlation analysis indicated that the lower Self-estimation in relationship with others correlated with higher proneness to shame and guilt.

Key Words : depression, shame, guilt, first-year university students, Egogram

## I 問題と目的

今日、恥と罪悪感は、精神疾患の病態理解と治療において、重要な鍵概念となってきている。

---

\* 人間学部心理学科

特に、恥、罪悪感と抑うつとの関連については、これまで、さまざまな研究が行われてきた。Ghatavi et al（2002）は、“恥は抑うつの様相（feature）である”と指摘し、Orth et al（2006）は、“恥と罪悪感とは抑うつに関連する変数である”と述べている。最近の研究では、例えば、Ghatavi et al（2002）が、うつ病患者では、抑うつと罪悪感との間に相関関係が認められ、比較群（過去のうつ病群、慢性心臓疾患群、健常統制群）に比べ、恥および罪悪感が高く、自尊心が低かったと報告している。Orth et al（2006）は、離婚し離散した家族から母親と父親を対象として、離婚事象に関連した恥および罪悪感、熟考（event-related rumination）、抑うつを調査したところ、恥が抑うつに影響していたと報告している。

ところで、近年、日本人大学生の休学、中退、留年率は増加傾向にあり、特に新入生に見られる心身の不調による休学や中退は、今日大きい問題である。その背景には、うつ病などのさまざまな精神疾患が存在する可能性が考えられる。岡田（2003）は、抑うつなどによる不適応的行動を恥と罪悪感との関連から捉え、“罪悪感や恥の感情は、適応的行動と不適応行動の両方に直接的に影響を及ぼしうる重要な感情である”と指摘し、“恥や罪の感情が強すぎる場合には、様々な適応上の困難をもたらす場合もあり得る。深刻で永続的な自責を伴う過剰な罪悪感、抑鬱などの障害にしばしば見られることが指摘されているし、過剰な恥の感情は、社会恐怖や引きこもりといった問題を引き起こすことが指摘されている”と述べている。この指摘からも、大学生の不適応的行動を抑うつ傾向、恥、罪悪感という視点から捉え、その知見を教育や援助に役立てることは、意義があるであろう。

さて、大学生活の中でも、大学入学期は、“家族から大学コミュニティの成員への移行期（鶴田，2001）”にあり、“過去を脱ぎ捨て、新しい生活へと足を踏み入れることが課題（Medalie, 1981; 鶴田，2001参照）”となる時期である。鶴田（2001）は、学生相談における「学生生活サイクル」の視点、すなわち、“大学生の学年の移行にともなう心理的課題の変化を軸として、学生相談事例および大学生全体を理解する視点”の重要性を強調している。鶴田（2001）によれば、その視点の特徴の1つは、“学生期（学生が大学に入学してから卒業するまでの期間、安藤，1991）を時間軸に沿って分節化し、それぞれの次期の学生の心理的特徴を明らかにすること”であり、“学生期を入学期（入学後1年間）、中間期（一般的には2年生と3年生、留年期間を含む）、卒業期（卒業前1年間）という下位次期に区分し、下位次期ごとの心理的特徴を記述する”ということである。さらに、鶴田（2001）は、Margolis（1989）が提示する、入学期の学生における「なじんだ世界からの分離」「自由の中での自己決定」「能力の獲得」という3つの課題を紹介している。以上のように、入学期にある大学新入生は、他の学年とは異なる独自の課題とそれに伴いやすい問題を持っていると考えられる。そのため、大学新入生に対しては、その心的特徴に合った援助が必要となってくると言える。

近年、わが国において、「初年次教育」が導入されてきている。「初年次教育」とは、“First-Year Seminar（導入教育）やFirst-Year Experience（初年次体験）として20世紀の初頭にアメリカではじまり1970年代に盛んになった（平田，2010）”活動の影響を受けて近年わ

が国に導入されたものであり、「リメディアル教育（補修教育）」すなわち、“本来は大学入学前に修得しているはずの高校課程の学習内容を、入学後に補修すること（藤田，2006）”を含んでいる。香川（2004）は、日本において初年次教育が注目される理由として、学力低下、無目的に進学してくる学生の増加、大学生活への不適応といった問題を挙げている。このような指摘からも、大学新生に対しては、今日では、従来とは異なる援助の必要性が出てきていると言えよう。

また、これまで大学生の学校不適応については、わが国では1960年代後半より盛んに研究が行われてきたものの、広沢（2007）が指摘するように、“大学生の全入時代に突入しつつある現在、日本においても高校から大学への以降の問題は重要なテーマになっている”ことから、大学教育は新しい局面を迎えていると言える。従来、大学新生の学校不適応の問題については、主として環境要因や性格要因との関連から検討されてきたが、上述したような、抑うつ傾向、恥、罪悪感という視点から論じた研究は少ない。本研究では、日本人大学新生を対象として、日本人大学生の恥および罪悪感を測定する新しい尺度を作成し、これまであまり検討されてこなかった、大学新生の抑うつ傾向、恥、罪悪感との関連を検討することを目的としている。

さて、これまで、恥と罪悪感は、臨床心理学の分野では、抑うつ以外の精神疾患との関連からも多く研究されてきている。例えば、境界性人格障害（以下、境界例と略記）における恥および罪悪感に関する研究では、Rüsch et al（2007b）が、“恥は境界例の中心的な感情であり、自傷行為、慢性的な自殺企図、怒り・敵意に関連する”と述べている。Rüsch et al（2007a）は、境界例への心理療法的アプローチには、恥の明示的（explicit）および暗示的（implicit）側面に焦点を当てることが必要であるとし、境界例女性では、恥傾向、罪悪感傾向、不安などが、社交不安女性や健常女性よりも高く、抑うつが統制された後では、恥傾向は、自己評価や生活の質と負の相関関係を示し、怒り・敵意と正の相関関係を示したと報告している。

摂食障害との関連では、Frank et al（1991）が、摂食障害者には顕著に恥と罪悪感が見られ、そのことが、摂食障害を他の精神病理から区別すると述べている。Burney et al（2000）は、オーストラリア人女性において、摂食行動に関連する恥は、摂食障害の重篤さを予測する最も強い因子であると報告している。

性的虐待との関連については、Andrews（1995）が、一般女性を対象として8年間の追跡調査を行い、虐待（性的虐待および物理的虐待）と抑うつとを媒介する「身体的恥（bodily shame）」の役割について検討している。その結果、「身体的恥」は幼少期の虐待に関連し、その時点での抑うつ症状が統制された後の慢性的あるいは反復的な抑うつに関連していたと報告している。

アダルトチルドレン（Adult Children）との関連では、Jones et al（1994）が、アルコール依存症の親をもつアダルトチルドレンの女性は、統制群に比べて抑うつが生じやすかったものの、恥傾向は高くはなかったと報告している。

トラウマと恥との関連では、Leskela et al（2002）が、戦時中に捕虜となりトラウマを持つ

退役軍人において、恥傾向とPTSD症状との間に正の相関があったが、罪悪感傾向とは相関が無かったと報告している。

薬物依存との関連では、O'Connor et al (1994) が、依存症の回復過程において、女性は恥と抑うつが高く、男性は無関心 (detachment) が高かったこと、また男女とも恥と外在化 (externalization) の傾向が高く、罪悪感が低かったと報告している。

このように、これまで、精神疾患の病態を理解し治療に役立てる上で、恥、罪悪感の要因を考慮することの重要性が強調されてきた。

Rüsch et al (2007a) は、“質問紙法を用いて恥と罪悪感の量的査定を行うことは、さまざまな精神障害においてこれらの感情が果たす役割を理解する上で役立つ”と述べている。これまでに、恥および罪悪感を測定する尺度としては、Tangney et al (1991) によるTOSCA-A (Test of Self-Conscious Affect for Adolescents) が知られている。その日本語版として、岡田 (2003) が、TOSCA-A日本語版を作成している。この質問紙は、米国の大学生を対象として調査したTOSCA-Aを日本語に翻訳し作成されたものであり、“既に報告されている知見を日本人サンプルにおいても追実験し、同様のことが言えるのか、文化的な違いが見られるのか”を検討したものである。TOSCA-A日本語版では、TOSCA-Aで用いられた15場面のシナリオから構成され、それぞれの場面記述の後に恥および罪悪感など5因子に対応する感情的反応文を提示し、5段階で評定させている。

岡田 (2003) は、これまでに作成された恥および罪悪感の尺度を、「形容詞チェックリスト」「記述文の評定」「感情誘発状況の評定」「シナリオ・ベースの測定」などに分類し、それぞれの方法における問題点を以下のように指摘している。まず、「形容詞チェックリスト方式の尺度」は、“表面的妥当性 (face validity) は高いが、評定対象に文脈がなく抽象的であるために、評定者の言語理解能力に依存するという問題点 (岡田, 2003)”がある。また、「感情誘発状況の評定」は、“生ずる感情を特定できないという根本的な問題 (岡田, 2003)”が存在する。「シナリオ・ベースの測定」について岡田 (2003) は、“調べたい感情だけでなく、場面状況に応じて反応が変動するために、内的整合性が低くなる傾向がある”というTangney et al. (2002) の指摘を紹介している。このような岡田 (2003) の指摘からも、現在のところ、日本人の大学新入生が、恥、罪悪感を持つ具体的な状況と、その状況において生じる恥、罪悪感の強さを直接的に測定するという研究は、ほとんど見られていないと言える。そのような研究を行うことで、より詳しく日本人大学新入生における恥、罪悪感の様相が明らかとなり、大学新入生に対する援助を行いやすくなるであろう。

さらに、従来におけるわが国の大学生を対象とした恥、罪悪感の研究では、ほとんどの研究が対象となる大学生の複数の学年を対象としているという特徴がある。例えば、永房 (2002) は、東京都内の18歳から25歳までの男女 (平均年齢が20.06歳) を対象に恥意識尺度を構成し、「同調不全」「社会規律違反」「視線感知」「自己内省」の4因子を抽出している。また、菊池ら (2006) は、“外国で開発された尺度の日本語版の作成ではなく、項目収集の段階から日本語を用

いた尺度構成をする”ことを目的に、TOSCA-3などの尺度を参考にしながら、日本人向けの新しい自己意識的感情尺度を構成し、「対人的負債感」「個人的苦痛」「罪責感」「恥」「共感的配慮」と「役割取得」の6つの因子を抽出している。そして、これら6種の自己意識的感情を、具体的なシナリオによって設定された場面を用いて同時に測定し、628名の大学生の回答を下に6つの自己意識的感情（対人的負債感、個人的苦痛、恥、罪悪感、役割取得、共感的配慮）を測定する12シナリオ（場面）、72項目からなる尺度（KA-JiKoKan-12）を構成している。成田ら（1990）は、18歳から24歳まで（平均年齢20.6歳）の大学生131名、女子看護学生51名、計171名を対象に、羞恥感情を引き起こす様々な状況を収集し、多変量解析による分類から、羞恥を引き起こす状況の分類し、さらに、18歳から24歳まで（平均年齢19.3歳）の大学生264名を対象にして、120項目からなる「状況別羞恥感情質問紙（Situation Shyness Questionnaire: SSQ）」を作成し、恥ずかしさの程度を4件法で評定を求めている。その結果、「かっこ悪さ」「気恥ずかしさ」「自己不全感」「性」の4因子を抽出している。有光（2001）は、18歳から24歳まで（平均年齢18.76歳）の近畿圏の大学生および短大生292名を対象として、罪悪感喚起状況尺度、状況別羞恥感情尺度、自己意識尺度、Big Five尺度による自記式調査を実施した結果、罪悪感と羞恥心間に高い正の相関が認められ、罪悪感には社会的適応機能があることを報告し、羞恥心は不適応行動につながるという可能性を示唆している。

以上のように、大学生の罪悪感に関連したほとんどの研究は、複数の学年の大学生を対象としており、これまで、大学新入生特有の抑うつ、恥、罪悪感の特徴を検討したものはほとんど見られていない。

ところで、恥や罪悪感には、性差があることが指摘されている。Lutwak et al（2001）は、恥、罪悪感には顕著な性差が認められ、女性は男性に比べ内的な怒り（inward anger）が強く、女性において罪悪感の強さを予測する因子は、怒りの統制の強さ、外的怒りの低さ、将来の成功に対する期待の低さであると報告している。この指摘からも、大学新入生の恥、罪悪感を知る上で、性差を検討することが必要となるであろう。

さらに、先述した境界例、摂食障害、アダルトチルドレンなどの恥、罪悪感に関する知見からは、恥および罪悪感が、性格特性との関連から論じられる必要があることが示唆されるが、これまで、わが国における大学生を対象とした研究において、恥および罪悪感傾向を性格特性との関連から詳しく検討したものは多くない。

性格特性を知る指標としては“心全体のまとめ役のように想定される「自我」の働き（仲野ら、2009）”を知るための、Berne, R.による交流分析理論に基づいた、エゴグラムが知られている。エゴグラムとは、“対人関係のパターン分析を通して自分自身の自我状態の傾向を知る（仲野ら、2009）”ための指標である。交流分析理論では、自我の状態を3つの層（P：Parent, A：Adult, C：Child）に分け、さらにPとCを2つの層（それぞれ、Critical Parent, Nurturing Parentと、Free Child, Adapted Child）に分けて考える。そして、“私達の対人的交流は、この5つの自我状態の間でやりとりがなされて展開（川瀬ら、1997）”すると想定し、“その交流のパ

ターンを分析して、うまく行かない原因を探ったり、どうすればよい方向に展開していくかを見出して、そのための練習をし、よりよい社会生活に役立てようとする（川瀬ら, 1997）”。個人の自我状態に基づいて生じる対人交流のパターンを知ることは、対人関係でのつまずきが不適応行動につながりやすい大学新入生を援助する上で、有用となるであろう。以上の理由から、本研究では、エゴグラムを用いて大学新入生の自我状態と対人関係の交流パターンを知り、抑うつ傾向、恥、罪悪感との関連を調べることとする。

最後に、Ghatavi et al. (2002) は、恥、罪悪感を、自尊心との関連を報告している。大学新入生にとっては、自尊心や自己評価の高さが、対人関係や学業でのつまずきから回復する重要な要因であると考えられる。そのため、本研究では、大学新入生の恥、罪悪感を自己評価との関連から調べることとする。

以上により、本研究は、以下の目的のもとに検討を行うものとする。

- 1) 大学生の恥傾向および罪悪感傾向尺度を作成する。
- 2) 大学生における抑うつ傾向と恥、罪悪感との関連を明らかにする。
- 3) 抑うつ傾向、恥傾向、罪悪感傾向を持ちやすい者の自我状態を検討する。
- 4) 恥傾向および罪悪感傾向における性差を明らかにする。
- 5) 自己評価と恥傾向および罪悪感傾向との関連を明らかにする。

## II 研究

### <予備調査>

#### 目的

大学生の恥傾向および罪悪感傾向尺度を作成するための項目を作成すること。

#### 方法

##### 1) 調査対象

首都圏のA大学およびB短大の新入生220名（男91名、女124名、不明5名、平均年齢18.50歳、 $SD = 1.56$ 歳）であった。

##### 2) 調査時期

平成17年4月上旬であった。

##### 3) 調査内容

心理学の講義中に、文章完成法による質問紙調査を集団式で実施した。内容は、下記の文章を、自由に5つ完成するものであった。

「私は、\_\_\_\_\_の時、恥の感情を持つ」

「私は、\_\_\_\_\_の時、罪悪感の感情を持つ」

## 結果

全ての学生の回答を、KJ法（川喜田, 1967）により項目群に分類し、各群から代表的な項目をほぼ同数ずつ選んだ。作成した項目について、心理学以外を専攻する、大学での教歴が20年以上である教員1名と筆者とで協議し、分かりにくい表現や重複する項目を修正・削除して、最終的に、恥傾向49項目、罪悪感傾向44項目を作成した。

### <本調査>

#### 目的

- 1) 予備調査で作成した項目から、「大学生の恥傾向尺度」「大学生の罪悪感傾向尺度」を作成し、信頼性と妥当性を検討すること。
- 2) 「抑うつ傾向」高低群間における恥傾向および罪悪感傾向の差異を検討すること。
- 3) 恥傾向および罪悪感傾向における性差を検討すること。
- 4) 恥傾向および罪悪感傾向の高い大学生に見られる自我状態を明らかにすること。

#### 方法

##### 1) 調査対象

首都圏のA大学およびB短大の学生256名であった。そのうち、欠損値があった36名分のデータを分析の対象から除外して、最終的に220名分（男95名、女125名、平均年齢18.64歳、 $SD=1.47$ 歳、不明2名）を分析対象とした。有効回答率は、85.90%であった。

##### 2) 調査時期

平成18年1月上旬であった。

##### 3) 調査内容

心理学の講義中に集団式で実施した。調査内容は、以下の通りである。

- ①抑うつ傾向尺度：Beck et al (1979) のBDI (Beck Depression Inventory) の日本語版（林, 1988）を使用した。評定は、4つの質問文の中から、最近の気持ちを最もよく表しているものを選ぶよう求めた。回答は0点から3点で得点化した。
- ②大学生の恥傾向測定尺度：予備調査で作成した80項目について、日常生活において恥の気持ちをどの程度持つかを、5件法（1. 全く持たない—5. 非常に持つ）で評定するよう求めた。
- ③大学生の罪悪感傾向測定尺度：予備調査で作成した80項目について、日常生活において罪悪感をどの程度持つかを、5件法（1. 全く持たない—5. 非常に持つ）で評定するよう求めた。
- ④エゴグラム：性格特性を測定する尺度として、杉田（1985）のエゴグラムチェックリスト（成人用）50項目を使用した。評定法は、はい（○）、どちらともつかない（△）、いいえ（×）の3件法であった。採点方法は、○2を2点、△を1点、×を0点とし、5つの自我状態（CP: Critical Parent, NP: Nurturing Parent, A: Adult, FC: Free Child, AC: Adapted Child）ごとに、合計得点を算出した。
- ⑤自己評価尺度：梶田（1988）の自己評価チェックリストから、現実自己評価に関する24項目

を使用した。自分の現在の状態を思い浮かべて、どの程度当てはまるかを、5件法（1. 全くそう思わない—5. とてもそう思う）で評定するよう求めた。

**結果**

1) 尺度の構成

①大学生の恥傾向尺度（TABLE 1 参照）

TABLE 1 大学生の恥傾向尺度の構造（主因子法, Varimax 回転）

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
<b>&lt;第1因子：注目因子&gt;</b>						
人前で意見を言う	.85	.02	.16	.07	.06	.76
人前に出る	.82	-.04	.14	.04	.08	.71
人前で話をする	.81	.08	.17	.05	.13	.71
人前で発表する	.79	.02	.10	.06	.11	.64
人から注目される	.69	.08	.20	.08	.05	.54
人にじっと見られる	.66	.26	.08	.01	.03	.50
授業中、先生に質問する	.52	.15	.17	.23	.08	.38
<b>&lt;第2因子：能力不全因子&gt;</b>						
簡単な漢字が読めない	.00	.84	.06	.15	.06	.74
簡単な漢字が書けない	.04	.80	.09	.16	.10	.68
漢字を間違えて書く	.01	.73	.05	.26	.01	.60
簡単な問題が分からない	.08	.64	.20	.04	.13	.47
常識的なことが分からない	.14	.63	.06	.05	.19	.45
言葉の使い方を間違える	.21	.57	-.02	.19	.06	.41
<b>&lt;第3因子：嘲笑因子&gt;</b>						
人に笑われる	.28	.12	.72	.12	.07	.63
人に馬鹿にされる	.22	.11	.67	.07	.18	.54
人にひやかされる	.29	.10	.64	.10	.13	.53
<b>&lt;第4因子：授業態度因子&gt;</b>						
授業をさぼる	.08	.17	.16	.76	.20	.67
授業に遅刻する	.23	.26	.07	.61	.12	.50
授業中居眠りをする	.06	.31	.05	.51	.15	.39
<b>&lt;第5因子：自己規範因子&gt;</b>						
人を差別や偏見の目で見ると	.21	-.02	.02	.15	.67	.52
困っている人を助けられない	.09	.07	.15	.14	.54	.34
情けないことをする	.09	.30	.20	-.10	.51	.41
自分で決めたことが守れない	-.05	.21	.05	.21	.45	.30
寄与率 (%)	18.42	15.13	7.39	6.78	6.26	
信頼性係数	.90	.87	.79	.75	.65	
信頼性係数（全体） $\alpha=.89$						

49項目について因子分析（主因子法, Varimax 回転）を行い、固有値と解釈可能性から5因子を抽出した。複数の因子に負荷が高い項目、解釈が困難である項目、因子負荷量が.40に満たない項目を除き、再度因子分析（主因子法, Varimax 回転）を行い、最終的に4因子18項目と

した。第1因子から順に、「注目因子」「能力不全因子」「嘲笑因子」「授業態度因子」「自己規範因子」と命名した。以下の分析においては、合成得点を尺度得点として使用した。尺度全体のCronbachの $\alpha$ 係数は.89であった。各因子の $\alpha$ 係数は、第1因子から順に、 $\alpha=.90$ 、 $\alpha=.87$ 、 $\alpha=.79$ 、 $\alpha=.75$ 、 $\alpha=.65$ であり、信頼性がほぼ確認された。

## ②大学生の罪悪感傾向尺度 (TABLE 2参照)

44項目について因子分析(主因子法, Varimax回転)を行い、固有値と解釈可能性から5因子を抽出した。複数の因子に負荷が高い項目、解釈が困難である項目、因子負荷量が.40に満たない項目を除き、再度因子分析(主因子法, Varimax回転)を行い、最終的に5因子19項目とした。第1因子から順に、「学業因子」「親因子」「無駄因子」「社会規範因子」「道徳因子」と命名した。以下の分析においては、合成得点を尺度得点として使用した。尺度全体のCronbachの $\alpha$ 係数は.83であった。各因子の $\alpha$ 係数は、第1因子から順に、 $\alpha=.83$ 、 $\alpha=.80$ 、 $\alpha=.77$ 、 $\alpha=.70$ 、 $\alpha=.68$ であり、信頼性がほぼ確認された。

TABLE 2 大学生の罪悪感傾向尺度の構造(主因子法, Varimax回転)

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
<b>&lt;第1因子: 学業因子&gt;</b>						
授業をさぼる	.82	.17	.14	.13	.11	.75
授業に遅刻する	.78	.10	.20	.13	.03	.67
授業中に居眠りする	.64	.18	.09	-.03	.05	.45
悪い成績をとる	.58	.14	.10	.17	.12	.41
<b>&lt;第2因子: 親因子&gt;</b>						
親に冷たい態度をとる	.22	.75	.16	.09	.11	.66
親とケンカする	.23	.69	.17	.01	.23	.60
親に心配をかける	.12	.66	.18	.08	.09	.50
<b>&lt;第3因子: 無駄因子&gt;</b>						
食べ物を粗末にする	.12	.21	.72	.27	.17	.67
まだ使えるものを捨てる	.23	.25	.60	.08	.19	.51
水や電気を無駄にする	.22	.15	.57	.14	.23	.46
<b>&lt;第4因子: 社会規範因子&gt;</b>						
人の物を借りたまま失くす	-.02	-.01	.11	.63	.18	.44
自分勝手な行動をとる	.12	.23	.05	.53	.21	.39
待ち合わせに遅れる	.21	.02	.04	.52	.07	.32
約束を破る	.03	.01	.14	.49	.06	.26
<b>&lt;第5因子: 道徳因子&gt;</b>						
人の不幸を見て見ぬふりする	.03	.16	.22	.22	.67	.58
人の悪口を言う	.15	.23	.05	.28	.51	.42
電車の中で老人に席をゆずらない	.10	.08	.26	.11	.51	.10
寄与率 (%)	13.78	10.69	8.87	8.75	7.55	
信頼性係数	.83	.80	.77	.70	.68	
信頼性係数(全体) $\alpha=.83$						

### ③自己評価尺度

24項目について因子分析(主因子法, Varimax回転)を行い, 固有値の推移から2因子が妥当であると判断した. 複数の因子に負荷が高い項目, 解釈が困難である項目, 因子負荷量が.40に満たない項目を除き, 2因子解により再度因子分析(主因子法, Varimax回転)を行い, 最終的に2因子9項目とした. 第1因を, 「対人関係因子」, 第2因子を「自己肯定因子」と命名した. 以下の分析においては, 合成得点を尺度得点として使用した. 尺度全体のCronbachの $\alpha$ 係数は.80であった. 各因子の $\alpha$ 係数は, 第1因子から順に,  $\alpha=.84$ ,  $\alpha=.76$ であった.

### ④恥傾向と罪悪感傾向の相関 (TABLE 4参照)

恥と罪悪感の全ての下位尺度間の相関係数をTABLE 4に示す. 男女別の相関係数においては, 恥の下位尺度間, 罪悪感の下位尺度間, および恥と罪悪感の下位尺度間で有意な相関関係が見られないものもあったが, 男女を含む全体においては, 恥尺度の「能力不全因子」と罪悪感尺度の「親因子」「社会規範因子」を除いて, 全ての因子間に有意な正の相関関係が見られた.

### 2) 抑うつ傾向高低群間における恥および罪悪感の差異 (TABLE 3参照)

Steer et al.(1986) は, BDIの合計得点が14点以上は中度の, 21点以上は重度の抑うつ症状にあるとしている(児玉ら, 1994参照). 本研究では, BDI全対象者のBDIの回答から, 抑うつ得点の下位25パーセント内(range:1-7点,  $M=5.22$ ,  $SD=1.56$ )を「抑うつ傾向」低群(男25名, 女29名, 計54名), 上位25パーセント内(range:19-36点,  $M=24.45$ ,  $SD=4.72$ )を「抑うつ傾向」高群(男24名, 女36名, 計59名)とした. 各群における男女の比率に有意な差は見られなかった( $\chi^2(1)=.31$ , ns).

TABLE 3 抑うつ傾向高低群における恥傾向および罪悪感傾向の平均値(標準偏差)とt検定結果

		抑うつ傾向低群 ( $n = 47$ )	抑うつ傾向高群 ( $n = 56$ )	t 値
恥傾向	注目	19.43( 4.51)	21.52( 5.24)	-2.15 *
	能力不全	19.50( 3.93)	20.37( 5.13)	-.95 ns
	嘲笑	10.00( 2.86)	12.93( 5.29)	-3.35 **
	授業態度	7.64( 2.33)	8.30( 2.80)	-1.30 ns
	自己規範	12.77( 2.63)	13.48( 2.76)	-1.34 ns
	尺度得点	68.87(10.55)	74.66(13.58)	-2.38 *
罪悪感傾向	学業	11.32( 2.64)	11.79( 3.76)	-.71 ns
	親	10.00( 2.47)	10.56( 2.41)	-1.15 ns
	無駄	9.75( 1.92)	10.30( 2.85)	-1.10 ns
	社会規範	15.68( 1.89)	16.58( 2.61)	-1.92 +
	不親切	10.50( 1.65)	10.84( 2.79)	-.34 ns
	尺度得点	57.25( 6.47)	59.91(11.29)	-1.40 ns

+ $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

TABLE 4 恥傾向と罪悪感傾向の相関係数(男: n = 75 女: n = 113)

恥傾向	注目	恥傾向				罪悪感傾向						
		能力不全	嘲笑	授業態度	自己規範	尺度得点	学業	親	無駄	社会規範	不親切	尺度得点
恥傾向	男											
	女											
	能力不全	.19**										
	男	.11										
	女	.25**										
	嘲笑	.46***	.25**									
	男	.39**	.33**									
	女	.44***	.16									
	授業態度	.22*	.46***	.29***								
	男	.26*	.35**	.30*								
	女	.14	.51***	.25**								
	自己規範	.19**	.34***	.23**	.35***							
	男	-.03	.18	.17	.37**							
	女	.36***	.50***	.32*	.36***							
	尺度得点	.70***	.72***	.63***	.64***	.58***						
	男	.64***	.69***	.67***	.65***	.44***						
女	.70***	.76***	.57***	.62***	.71***							
罪悪感傾向	学業	.19**	.46***	.22**	.75***	.35***	.56***					
	男	.26*	.39**	.21+	.73***	.33**	.57***					
	女	.09	.52***	.20*	.78***	.41***	.55***					
	親	.22**	.13+	.28***	.32***	.33***	.36***	.40***				
	男	.22**	.04	.31**	.34***	.37**	.36**	.38***	.29**			
	女	.22*	.24*	.27**	.33***	.30**	.38***	.29***	.59***			
	無駄	.19**	.28***	.24**	.19**	.42***	.39***	.47***	.55***	.27***		
	男	.08	-.16	.02	.21+	.19+	.06	.47***	.55***	.27***		
	女	.33***	.25**	.12	.25**	.39***	.39***	.47***	.55***	.27***		
	社会規範	.23**	.05	.11	.24**	.25***	.25***	.28*	.28*	.28*		
	男	-.11	.29*	.28*	.21+	.39**	.28*	.22+	.22+	.19		
	女	.36***	.28**	.09	.11	.40***	.40***	.28**	.33***	.33***		
	不親切	.20**	.18*	.20**	.26***	.46***	.36***	.47***	.41***	.49***		
	男	.04	-.05	.09	.20+	.42***	.17	.33**	.55***	.29*		
	女	.16	.38***	.15	.25**	.42***	.42***	.35***	.36***	.44***		
	尺度得点	.29***	.33***	.29***	.53***	.51***	.55***	.74***	.61***	.74***	.74***	
男	.15	.16	.26*	.50***	.47***	.43***	.71***	.80***	.54***	.76***		
女	.31**	.49***	.24**	.54***	.62***	.62***	.76***	.75***	.62***	.69***		

+p < .10, \*\*p < .05, \*\*\*p < .01, \*\*\*\*p < .001

恥および罪悪感傾向の「抑うつ傾向」による差の検討を行うため、恥および罪悪感傾向の尺度得点および各下位尺度得点についてt検定を行った。その結果、恥傾向尺度の「注目」と「嘲笑」得点、および、恥傾向尺度得点について、「抑うつ傾向」高群は低群より有意に高い得点を示していた。罪悪感傾向尺度については、「抑うつ傾向」高低群間の得点差は有意ではなかった。度得点および各下位尺度得点についてt検定を行った。その結果、恥傾向尺度の「注目」と「嘲笑」得点、および、恥傾向尺度得点について、「抑うつ傾向」高群は低群より有意に高い得点を示していた。罪悪感傾向尺度については、「抑うつ傾向」高低群間の得点差は有意ではなかった。

3) 恥傾向および罪悪感傾向における性差（TABLE 5 参照）

恥および罪悪感傾向における男女差の検討を行うため、恥および罪悪感傾向の尺度得点および各下位尺度得点についてt検定を行った。その結果、恥傾向尺度においては、「自己規範」下位尺度を除く全ての下位尺度、および罪悪感傾向尺度得点について、女性は男性より有意に高い得点を示した。罪悪感傾向尺度については、「親」下位尺度を除く全ての下位尺度、および罪悪感傾向尺度得点で、女性は男性より有意に高い得点を示した。

TABLE 5 男女別の恥傾向および罪悪感傾向の平均値（標準偏差）と t 検定結果

		男性 (n = 95)	女性 (n = 132)	t 値
恥傾向	注目	18.44 ( 5.23)	21.67 ( 4.71)	-4.86 ***
	能力不全	18.27 ( 5.12)	19.61 ( 4.59)	-2.07 *
	嘲笑	9.54 ( 2.83)	10.89 ( 2.31)	-3.97 ***
	授業態度	6.97 ( 2.49)	8.07 ( 2.56)	-1.32 **
	自己規範	12.64 ( 2.88)	13.29 ( 2.55)	-1.78 +
	尺度得点	65.86 (11.64)	73.53 (11.29)	-4.98 ***
罪悪感傾向	学業	10.54 ( 3.44)	11.64 ( 3.09)	-2.52 *
	親	10.05 ( 2.66)	10.30 ( 2.14)	-.79 ns
	無駄	9.73 ( 2.68)	10.50 ( 1.92)	-2.41 *
	社会規範	15.51 ( 2.54)	16.72 ( 2.01)	-4.01 ***
	不親切	9.80 ( 2.56)	11.38 ( 1.87)	-5.11 ***
	尺度得点	55.62 ( 9.62)	60.54 ( 7.60)	-4.14 ***

+p < .10, \*p < .05, \*\*p < .01, \*\*\*p < .001

4) 性格特性が抑うつ傾向に及ぼす影響（FIGURE 1 参照）

性格特性が「抑うつ傾向」に与える影響を検討するため、エゴグラム の5つの自我状態（CP, NP, A, FC, AC）の得点を説明変数、BDI得点（「抑うつ傾向」）を目的変数とする強制投入法による重回帰分析を男女別に行った。その結果、男性では、「抑うつ傾向」に有意に関連している予測変数は見られなかった（R<sup>2</sup>=.10, ns）。他方、女性では、ACが正に有意な値を示し（β=.30, p<.01, R<sup>2</sup>=.19, p<.01）、Aが負に有意な傾向を示した（β=-.18, p<.10）。

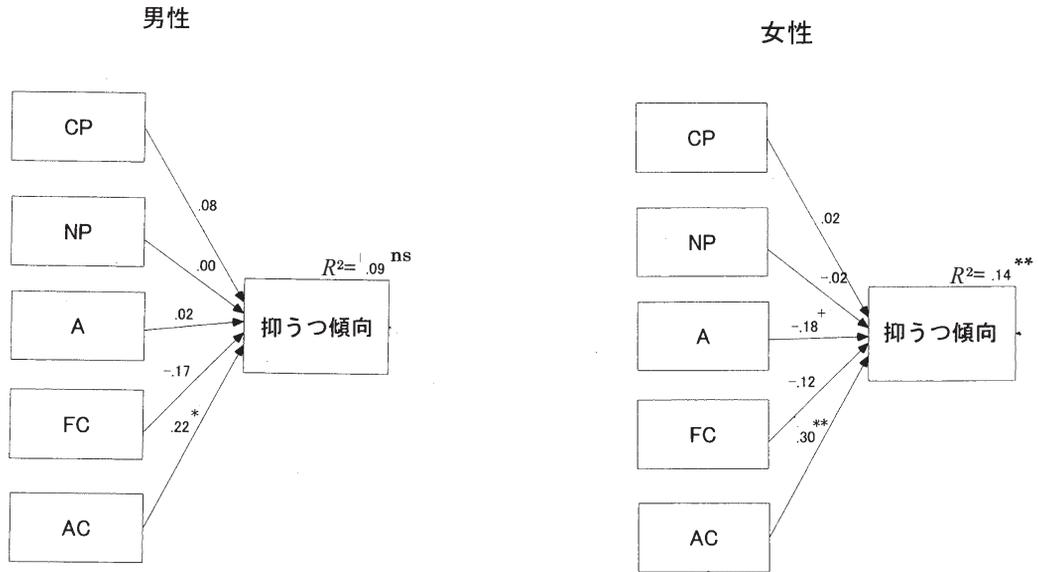


FIGURE 1 エゴグラムの自我状態と抑うつ傾向に関する男女別重回帰分析パス図  
 (\*\* $P < .01$ , \* $P < .05$ , + $P < .10$ )

5) 性格特性が恥傾向および罪悪感傾向に及ぼす影響 (FIGURE 2, 3 参照)

性格特性が恥傾向に与える影響を検討するため、エゴグラムの5つの自我状態 (CP, NP, A, FC, AC) の得点を説明変数、恥傾向得点を目的変数とする強制投入法による重回帰分析を男女別に行った。その結果、男性では、CPが正に有意な値を示し、AとFCが負に有意な値を示した (それぞれ、 $\beta = .34, p < .01$ ;  $\beta = -.38, p < .01$ ;  $\beta = -.26, p < .05, R^2 = .37, p < .01$ )。他方、女性では、ACが正に有意な値、FCが負に有意な値を示し、CPが正に有意な傾向を示した (それぞれ、 $\beta = .35, p < .01$ ;  $\beta = -.25, p < .05$ ;  $\beta = .18, p < .10, R^2 = .21, p < .01$ )。

次に、性格特性が罪傾向に与える影響を検討するため、エゴグラムの5つの自我状態 (CP, NP, A, FC, AC) の得点を説明変数、罪傾向得点を目的変数とする強制投入法による重回帰分析を男女別に行った。その結果、男性では、CP, NPが正に有意な値を示し、Aが負に有意な値を示した (それぞれ、 $\beta = .32, p < .05$ ;  $\beta = .39, p < .01$ ;  $\beta = -.29, p < .05, R^2 = .36, p < .01$ )。他方、女性では、CPが正に有意な値を示し、Aが負に有意な傾向を示した (それぞれ、 $\beta = .29, p < .01$ ;  $\beta = -.22, p < .05; R^2 = .17, p < .05$ )。

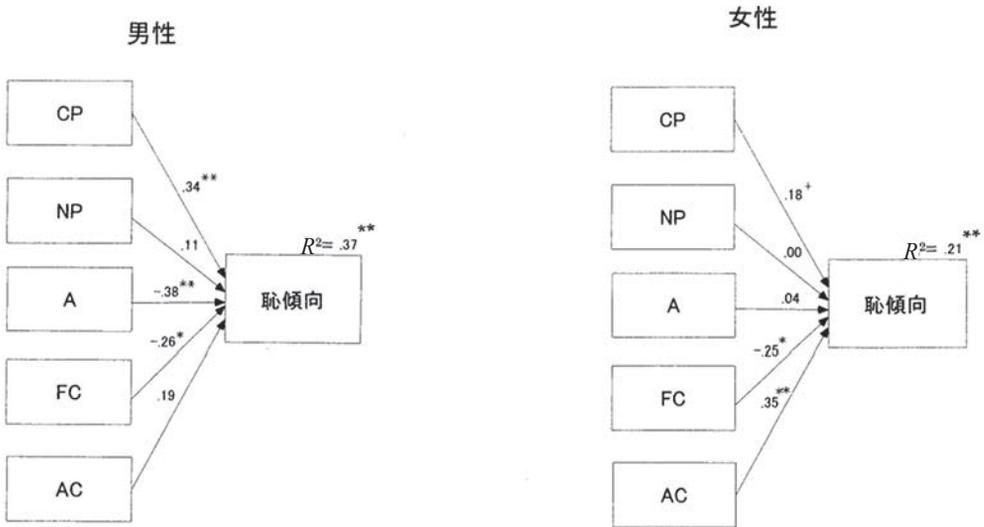


FIGURE 2 エゴグラムの自我状態と恥傾向に関する男女別重回帰分析パス図  
 (\*\* $P < .01$ , \* $P < .05$ , + $P < .10$ )

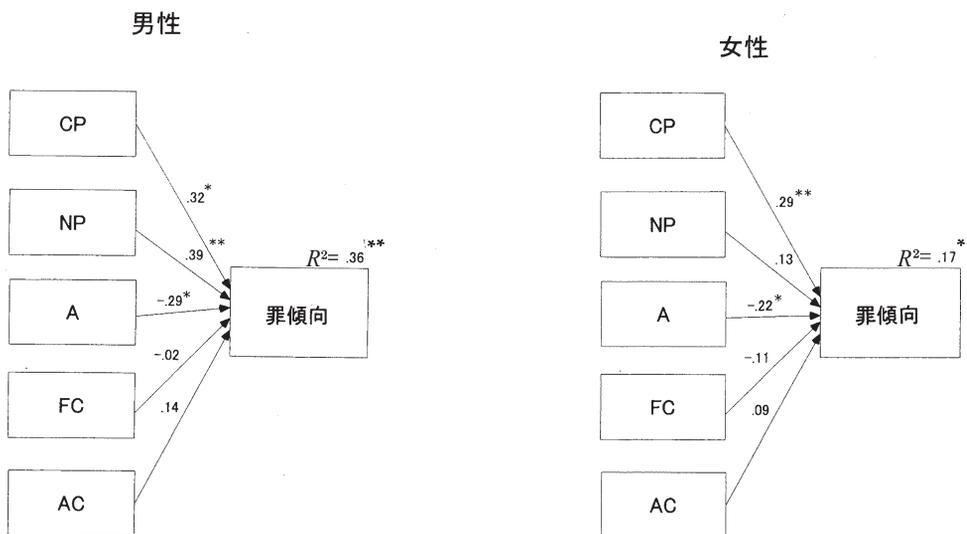


FIGURE 3 エゴグラムの自我状態と罪傾向に関する男女別重回帰分析パス図  
 (\*\* $P < .01$ , \* $P < .05$ , + $P < .10$ )

## 6) 恥傾向および罪悪感傾向と自己評価との関連

恥および罪悪感傾向と、自己評価尺度とのピアソンの単相関係数を算出した。その結果、自己評価尺度は、尺度得点と恥および罪悪感傾向尺度との間に高い負の相関が認められた。また、対人関係と恥および罪悪感傾向尺度との間に高い負の相関が認められた。自己の能力と罪悪感傾向尺度の親との間に正の相関、恥傾向尺度の人前との間に負の相関が認められた。

### 考察

#### 1) 尺度の構成

##### ①大学生の恥傾向尺度

本研究においては、大学生の恥傾向尺度として、「注目因子」「能力不全因子」「嘲笑因子」「授業態度因子」「自己規範因子」の4つの因子が抽出された。

成田ら（1990）は、大学生が羞恥感情を引き起こす状況の構造を多変量解析を用いて調べ、「かっこ悪さ」「気恥ずかしさ」「自己不全感」「性」の4因子（状況カテゴリ）を抽出している。本研究において、成田ら（1990）の見出した「性因子」が見られなかったことは、本研究の対象者が首都圏の大学生であり、成田ら（1990）が対象とした関西圏の大学生とは異なる文化的特徴を反映していることも考えられるため、今後の検討が必要である。

また、有光（1999）、成田ら（1990）らの知見とは異なり、本研究では恥傾向尺度として「授業態度因子」が抽出された。成田ら（1990）の調査対象は、関西圏の18歳から24歳まで（平均年齢19.3歳）の大学生であり、有光（1999）の調査対象は、近畿圏の18歳から24歳まで（平均18.76歳）であったため、ある程度大学での学習環境に慣れ学習技術を身に付けており、「授業態度因子」が抽出されなかったものと考えられる。他方、本研究が対象とした大学新入生では、大学の授業環境に適応しようとする気持ちが強く、高校時代と同様、授業を「さぼる」「居眠りする」ことなどに対し、強い恥の意識を持っていたものと考えられる。

##### ②大学生の罪悪感傾向尺度

本研究においては、「学業因子」「親因子」「無駄因子」「社会規範因子」「道徳因子」の4つの因子が抽出された。有光（1999）は、青年後期に適用可能な特性罪悪感尺度を開発し、「対人的道徳への背き」「道徳的行為の不実行」「社会規範への背き」「他者への責任感」の4因子を抽出している。恥傾向尺度と同様、有光（1999）らの尺度とは異なり、本研究では「学業因子」が見られたことは、本研究における対象者が学習環境への適応を課題とした大学新入生であることに関係していると思われる。

広沢（2007）は、“新入生がその大学に適応していく過程において、対人関係面と学習面の2つの側面が重要である”と指摘している。そして、“生徒から学生へ以降する課程での学習面での適応は、大学新入生にとって、あるいは又大学教員にとって重要な課題である（広沢、2007）”と述べている。その理論的根拠として、広沢（2007）は、“学習適応者は不適応者に比べ、4月と10月の両時点で「暗記」因子（学習技術）をのぞくすべてにおいて、学習技術・学習特性のスコアが高いこと”を挙げている。このことから、広沢（2007）は、“大学新入生が入

学して半年後に学習面で適応できるか否かは、大学入学後の学習技術や学習特性が関わっているというよりもむしろ、高校までの学習特性と密接に関係している”と結論づけている。また、広沢（2007）の、“全入時代を迎えつつある現在、高校での学力もさることながら、高校までの学習技術、学習特性、さらに学習習慣といったものが入試段階で重要なフィルターとして考慮されるべきではないだろうか”という指摘からも、今後、大学新生の学校適応を促すためには、学習面での補助を目的としたさらなる取り組みが必要になってくると言えるであろう。

### ③恥傾向と罪悪感傾向の相関

男女別の相関係数においては、恥傾向の下位尺度間、罪悪感傾向の下位尺度間、および恥傾向と罪悪感傾向の下位尺度間に、有意な相関関係が見られないものもあったが、男女を含む全体においては、恥傾向尺度の「能力不全因子」と罪悪感傾向尺度の「親因子」「社会規範因子」を除いて、全ての因子間に有意な正の相関関係が見られた。

有光（2001）は、罪悪感と羞恥心間に相関が高いことについて、両者は“自己の否定的評価に関連した情動である点など多くの共通点があり、同一の状況で同時に経験することがあるため”と述べている。本研究の結果は、有光（2001）の知見にほぼ合致するものであると言える。

### 2) 抑うつ傾向高低群間における恥傾向および罪悪感傾向の差異

本研究では、恥傾向尺度の「注目因子」と「嘲笑因子」、および、恥傾向尺度得点において、抑うつ傾向高群は低群より有意に高い得点を示していた。罪悪感傾向尺度については、抑うつ傾向高低群間の得点差は有意ではなかった。このことは、抑うつ傾向の高い者は、「注目」や「嘲笑」といった場面において、強く恥を感じる傾向があることを示している。

Alexander et al（1999）は、“非臨床群では、恥よりも罪悪感が抑うつと関連しており、恥傾向は、否定的状況に対する安定化した帰属スタイル、否定的自己評価、服従的な行動、および内面化された怒りと関連している”と報告している。他方、Orth et al（2006）は、“罪悪感と恥を同時に調査した研究においては、恥が著しくユニークな効果を持っている”と示唆している。本研究は、Orth et al（2006）の結果を支持するものと言える。

さらに、Webb et al（2007）が、大学生の抑うつ症状は恥と罪悪感に関連し、心理的虐待の経験は抑うつおよび恥と正の相関関係があるが、罪悪感とは相関関係が無かったと報告していることから、大学生の恥傾向を考える場合、心理的虐待の経験との関連からも検討することが必要となろう。

### 3) 恥傾向および罪悪感傾向における性差

恥傾向尺度については、「自己規範因子」で10%水準の有意傾向が見られたことを除いて、全ての因子において女性は男性より有意に高い得点を示した。また、罪悪感傾向尺度については、「親因子」を除く全ての因子において、女性は男性より有意に高い得点を示した。この結果は、恥および罪悪感には顕著な性差が認められるというLutwak et al（2001）の結果や、罪悪感、羞恥心ともに女性の方が男性よりも高かったとする有光（2001）の知見を支持している。罪悪

感傾向の「親」因子に性差が認められなかったことは、「入学期」は親元から離れて新しい生活を始める時期であり、入学や転居に際して親に経済的負担をかけてしまったという意識が、男女とも同じようにあるためであろう。

広沢（2007）は、“性差については、適応者と不適応者の割合が男子ではほぼ半々であるのに対し、女子では7割が適応していると答えていることから、明らかに女子の方が大学での学習面での適応力が高い”と指摘し、その理由として、“高校や大学での学習技術や学習特性が多分に関与している推測される（広沢，2007）”と述べている。このことから、学習面での適応力が、恥傾向や罪悪感傾向と関連していることも考えられるため、今後、恥傾向、罪悪感傾向における性差については、学力との関連から検討していくことも必要であろう。

また、Frank et al（1991）は、摂食障害の女子大学生が、健常あるいは抑うつ的な女子大学生よりも、食事との関連で恥の経験を持つと報告している。Sanftner et al（1998）は、無茶喰いする女子大学生はしない女子大学生に比べて自己評価、否定的感情、恥および罪悪感がより変動しやすく、摂食エピソードに先行し自己評価、肯定的感情が低下し、恥と罪悪感が高くなると報告している。摂食障害は、青年期女子において多く見られることから、今後、恥傾向、罪悪感傾向と摂食障害との関連を検討することも期待される。

#### 4) 性格特性が抑うつ傾向に及ぼす影響

男性では、抑うつ傾向に関連する予測変数は見られなかったのに対し、女性では、ACが正に有意な値を示し、Aが負に有意な傾向を示していた。このことから、女性ではACの高い自我状態が抑うつに影響していることが示された。ACは、“自分の本当の感情を抑えて親や教師の期待に沿おうと勤めている部分（杉田，1985）”であり、“具体的には、イヤなことをイヤと言えない、簡単に妥協してしまう、自然な感情を表さない、自発性に欠け他人に依存しやすい、といった姿である（杉田，1985）”。また、Aとは、“われわれの人格の中で、事実に基づいて物事を判断しようとする部分（杉田，1985）”であり、“知性、理性と深く関連しており、合理性、生産性、適応性を持ち、冷静な計算に基づいて機能する（杉田，1985）”部分である。このことから、抑うつ傾向の高い女性では、ネガティブな事象に対して、理性的・合理的な判断に基づいた状況判断ができにくく、また負の感情を表出することが苦手であるという自我状態が影響していることがうかがえる。すなわち、感情優位で状況を判断する傾向があり、嫌なことを嫌と言えないといった消極的な対人交流のパターンが、抑うつ傾向に関与していることがうかがえる。

#### 5) 自我状態が恥傾向および罪悪感傾向に及ぼす影響

男性では、恥傾向影響を及ぼしていたのは、高いCPと、低いAおよびFCであった。それに対し、女性では、高いACや低いFCが恥に影響を及ぼしていた。CPとは、“自分の価値観や考えを正しいものとし、それを譲ろうとしない部分（杉田，1985）”であり、“われわれの両親や理想と深く関連していて、主として子供が生活するうえで必要なさまざまな規則などを教えるが、同時に批判や非難も行う（杉田，1985）”ものであり、“このCPが強すぎると、尊大で支配的な態

度、命令的な口調、ほめるより責める傾向などが前面に出てくる（杉田，1985）”。また、FCとは、“本能的、自己中心的、積極的であるとともに、好奇心や創造性に満ちている。道徳や規範など、外界の現実を考へることなく、即座に快感を求め、不快や苦痛を避ける（杉田，1985）”という部分である。

このことから、男性では、本能的、自己中心的、積極的に物事を行うことが少なく、自己や他者に対する批判・非難が多く、かつ、事実に基づいて物事を判断したり、合理性、生産性、適応性を持ち、冷静な計算に基づいて行動することが少ない、という自我状態が、恥傾向の高さに影響していると考えられる。すなわち、男性では自他に対して批判的で、自分の好きなことを抑制しがちであるという自我状態に、合理的判断の低さが重なった場合に、「恥傾向」の強さにつながると考えられる。他方、女性では、低いFCと高いACが恥傾向に関連していたことから、“自分の本当の感情を抑えて親や教師の期待に沿おう（杉田，1985）”とする「いい子」の部分が強く、“イヤなことをイヤと言えない、簡単に妥協してしまう、自然な感情を表さない、自発性に欠け他人に依存しやすい（杉田，1985）”，といった、自己抑制的な自我状態が恥傾向に影響すると考えられる。

自我状態と罪悪感傾向との関連については、男性では、高いCP、NPと、低いAが強い罪悪感傾向に関連していた。他方、女性では、高いCPと低いAが関連していた。男女とも、高いCPおよび低いAが罪悪感に影響を及ぼす点は同じであるが、男性では、それに加えて高いNPが関連していることが示された。すなわち、男女とも、自他に対して批判的であり、合理性、生産性、適応性が低く冷静な計算に基づいて機能しないという自我状態が罪悪感の高さに影響するという点は共通しているが、男性ではそれに加えて、NPの高さ、すなわち、“親切、思いやり、寛容な態度（杉田，1985）”があり、“子供や後輩をいたわり、励まし、親身になって面倒を見る（杉田，1985）”，“人の苦しみをわがことのように感じとろうとする保護的な、やさしい面（杉田，1985）”が強い場合、罪悪感傾向が高くなることが分かった。

有光（2001）は、罪悪感、羞恥心の性差を報告し、“女性は内省的な性格であることが罪悪感につながるが、男性は自己意識傾向と無関係に罪悪感を経験する”と述べている。また、有光（1999）は、“羞恥心の影響を取り除いた罪悪感は、調和性、私的自己意識と正の相関を示していた”ことから、罪悪感の社会適応的側面について指摘している。また、“私的自己意識が高い人は自己内省しやすく自分についてのより明瞭な知識をもつことから、自分の行動の失敗に注意が向いやすくなり罪悪感を経験しやすい（有光，2001）”と述べている。本研究において、男女ともCPが高いことが罪悪感傾向の高さに関連していたことは、有光（1999，2001）の指摘を裏付けているものと言えよう。さらに、本研究では、有光（1999，2001）の知見に加えて、特に男性において他者における思いやりや寛容な態度の高い者が、罪悪感傾向を持ちやすいことが示された。このことは、有光（1999）の言うように、調和性、社会的適応的側面の反映とも言えるが、罪悪感が高すぎる場合、不適応行動につながることも考えられるため、学生に罪悪感傾向の良い面と悪い面の双方に気づかせた上で、適応的行動を促すような、自己理解を高める

活動が望まれる。

#### 6) 恥・罪悪感と自己評価との関連

本研究では、自己評価尺度の尺度得点と恥傾向の尺度得点および罪悪感傾向の尺度得点の間に高い負の相関が認められた。すなわち、恥傾向および罪悪感傾向が高い者ほど自己評価低いという結果であった。また、自己評価尺度の「対人関係因子」と恥傾向の全ての因子および罪悪感傾向の全ての因子との間に高い負の相関が認められた。すなわち、対人関係における自己評価が低い者ほど、恥傾向および罪悪感傾向が大きいという結果であった。これは、Barbara, et al (1999) など従来の結果と一致するものである。

西田ら (2009) は、“わが国における大学生の特徴の一つとして、近年、希薄なコミュニケーションスキルを基盤に人間関係を構築していることが挙げられ、このことは種々の対人的な心の問題の増加に結びついている”と指摘している。今後、大学新入生を対象としたソーシャル・スキルズ・トレーニングなどが導入され、対人場面における自己肯定感を高めるような取り組みが行われることが期待される。

### III まとめと今後の課題

本研究は、

- 1) 大学生の恥傾向および罪悪感傾向尺度を作成する。
- 2) 大学生における抑うつ傾向と恥、罪悪感との関連を明らかにする。
- 3) 抑うつ傾向、恥傾向、罪悪感傾向を持ちやすい者の自我状態を検討する。
- 4) 恥傾向および罪悪感傾向における性差を明らかにする。
- 4) 自己評価と恥傾向および罪悪感傾向との関連を明らかにする。

という目的で行われた。

その結果、①女性は男性よりも恥傾向および罪悪感傾向を持ちやすい、②男女とも高いACは抑うつ傾向の高さを予測する因子である、③男性では、恥傾向を予測する因子は、高いCP、低いAおよびFCであり、女性では、低いFCと高いACである、④男性では、罪悪感傾向を予測する因子は、高いCPおよびNP、低いAであり、女性では、高いCP、低いAである、⑤対人関係に関する自己評価が低いほど、恥傾向、罪悪感傾向が高いことなどが明らかになった。

Stuewig et al (2005) は、8歳から思春期までの縦断的研究において、乳幼児期の厳しすぎる養育が思春期の恥傾向に関連し、その関連には思春期の親の拒絶が媒介していたこと、また親から拒絶された若者は他の若者に比べて恥傾向が高く、罪悪感傾向が低かったことを報告している。また、“恥と罪悪感は、思春期の抑うつと非行を低減するための介入と予防的取り組みを行う上で有用で重要な視点を提供する”と述べている。このような知見からも、今後、恥傾向と罪悪感傾向の検討においては、乳幼児期や現在の親子関係にも視点を当てた研究が行われることが期待されよう。

さらに、先述したように、「入学期」は、高校から大学への移行期であり、多くの学生は、中学、高校時代の経験になお強く依拠した心的特徴を持っている。また、家庭から大学コミュニティへの移行に際して、現在における親との関係が学校適応に対し大きい割合を占めていることも特徴である。今後は、大学入学以前の心的外傷体験の有無や、現在の家庭との関係などを含み、より包括的な視点から、大学新入生の恥傾向、罪悪感傾向を検討することが必要であろう。

## 引用文献

- Alexander, B., Brewin, C.R. 1999 An investigation of shame and guilt in a depressed sample. *British Journal of Medical Psychology*, **72**, 323-338.
- 安藤延男 1991 座談会：キャンパスライフと学生相談の役割 全国学生相談研究会議 (編) 現代のエスプリ, 293: キャンパス・カウンセリング 至文堂 5-30.
- Andrews, B. 1995 Bodily shame as a mediator between abusive experiences and depression. *Journal of abnormal psychology*, **104**(2), 277-285.
- 有光興記・今田 寛 1990 特性罪悪感尺度作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集, **41**, 250, 7-15.
- 有光興記 2001 罪悪感、羞恥心と自我状態の関係 性格心理学研究, **9**(2), 71-86.
- Barnen, J., & Burney J, Irwin, H.J. 2000 Shame and guilt in women with eating-disorder symptomatology. *Journal of clinical psychology*, **56**(1), 51-61.
- 藤木大介・沖林洋平 2008 入学後3ヶ月間の大学教育を通じた批判的思考態度の変化：新入生がもつ専攻領域に関する知識の影響. 日本教育工学会論文誌, **32**(Suppl.), 37-40.
- 藤田哲也 2006 初年次教育の目的と実際 リメディアル教育研究, 1-1 (第1回大会特集), 1.
- Ghatavi, K., Nicolson, R., MacDonald, C., Osher, S., & Levitt, A. 2002 Defining guilt in depression: a comparison of subjects with major depression, chronic medical illness and healthy controls. *Journal of affective disorders*, **68**(2-3), 307-315.
- 平田祐子 2010 短期大学における初年次教育の取り組み -国語表現指導の提案- 高田 短期大学紀要, **28**, 77-88.
- 広沢俊宗 2007 大学新入生の適応に関する研究(1): 学習面での適応-不適応に関わる諸変数の検討 (特集 スポーツマネジメント) 関西国際大学研究紀要, **8**, 121-138.
- Jones, D.J., & Zalewski, C. 1994 Shame and depression proneness among female adult children of alcoholics. *The International journal of the addictions*, **29**(12), 1601-1609.
- 香川順子 2005 女子大学生を対象とした自己発見支援プログラムの開発と評価：初年次教育の視点から 日本教育工学会論文誌, **28**(suppl.), 233-236.
- 川瀬正裕・松本真理子編 1997 新自分さがしの心理学 自己理解ワークブック ナカニシヤ出版
- 川喜田二郎 1967 発想法 中央公論社
- 菊池章夫・有光興記 2006 新しい自己意識的感情尺度の開発 パーソナリティ研究 **14**(2), 137-148.
- 児玉昌久・片柳弘司・島田洋徳・坂野雄二 1994 大学生におけるストレスコーピングと自動思考、状態不安、および抑うつ症状との関連 ヒューマンサイエンス, **7**(1), 14-26.
- Leskela, J., Dieperink, M., & Thuras, P. 2002 Shame and posttraumatic stress disorder. *Journal of traumatic stress*, **15**(3), 223-226.
- Lutwak, N., Panish, J.B., Ferrari, J.R., & Razzino, B.E. 2001 Shame and guilt and their relationship to positive expectations and anger expressiveness. *Adolescence*, **36**(144), 641-653.

- Margolis, G. 1989 Developmental opportunities. In Grayson, P.A. & Cauley, K. (eds.), *College psychotherapy*. The Guilford Press. 71-91.
- Medalie, J.D. 1981 The college years as a mini-life cycle: Developmental tasks and adaptive options. *Journal of the American College Health Association*, **30**, 75-79.
- 森 朋子 2009 初年次における協調学習のエスノグラフィ 日本教育工学会論文誌, **33**(1), 31-40.
- 永房典之 2002 日本人大学生の恥意識に関する研究 道徳意識・罪悪感・自尊心・シャイネスとの関係 東洋大学大学院紀要, **39**, 105-119.
- 仲野好重・桜本和也 2009 大学一年生にとっての「自分探し」とは何か?: 初年次教育としての自己発見授業とアイデンティティの模索 大手前大学論集, **10**, 177-195.
- 成田健一・寺崎 正治・新浜邦夫 1990 羞恥感情を引き起こす状況の構造 - 多変量解析を用いて - 関西学院大学人文論究, **40**(1), 73-92.
- 西田順一・橋本公雄 2009 初年次学生の社会的スキル改善・向上を意図した大学体育実技の心理社会的有効性 大学体育学, **6**(1), 91-99.
- O'Connor, L.E., Berry, J.W., Inaba, D., Weiss, J., & Morrison, A. 1994 Shame, guilt, and depression in men and women in recovery from addiction. *Journal of substance abuse treatment*, **11**(6), 503-510.
- 岡田顕宏 2003 日本人大学生の恥および罪悪感傾向の測定: TOSCA-A 日本語版作成の試み 札幌国際大学紀要, **34**, 31-42.
- 岡田顕宏・佐々木 淑子 2004 恥および罪悪感喚起状況における大学生の防衛的反応について - PF スタディの反応に対する精神分析的解釈の試み - 札幌国際大学紀要, **35**, 11-19.
- Orth, U., Berking, M., & Burkhardt, S. 2006 Self-conscious emotions and depression: rumination explains why shame but not guilt is maladaptive. *Personality and social psychology bulletin*, **32**(12), 1608-1619.
- Rüsch, N., Corrigan, P.W., Bohus, M., Jacob, G.A., Brueck, R., & Lieb, K. 2007a: Measuring shame and guilt by self-report questionnaires: a validation study. *Psychiatry research*, **150**(3), 313-325.
- Rüsch, N., Lieb, K., Göttler, I., Hermann, C., Schramm, E., Richter, H., Jacob, G.A., Corrigan, P.W., & Bohus, M. 2007b Shame and implicit self-concept in women with borderline personality disorder. *The American journal of psychiatry*, **164**(3), 500-508.
- Sanftner, J.L., & Crowther, J.H. 1998 Variability in self-esteem, moods, shame, and guilt in women who binge. *The International journal of eating disorders*, **23**(4), 390-397.
- Stuewig, J., & McCloskey, L.A. 2005 The relation of child maltreatment to shame and guilt among adolescents: psychological routes to depression and delinquency. *Child maltreatment*, **10**(4), 324-336.
- 鶴田和美 2001 第3部1章 青年期: アイデンティティの危機 下山晴彦・丹野義彦(編) 講座臨床心理学 5 発達臨床心理学 東京大学出版会 Pp.135-149.
- 杉田峰康 1985 交流分析 講座サイコセラピー 8 日本文化科学社
- Tangney, J.P., Wagner, P.E., Gavlas, J., & Gramzow, R. 1991 The test of self-conscious affect for adolescents (TOSCA-A). George Mason University, Fairfax, VA.
- Tangney, J.P., Wagner, P., & Gramzow, R. 1992: Proneness to shame, proneness to guilt, and psychopathology. *Journal of abnormal psychology*, **101**(3), 469-478.
- Tangney, J.P., Wagner, P.E., Hill-Barlow, D., Marschall, D.E., & Gramzow, R. 1996 Relation of shame and guilt to constructive versus destructive responses to anger across the lifespan. *Journal of personality and social psychology*, **70**(4), 797-809.

大学新入生における抑うつ傾向と恥および罪悪感との関連（加曾利岳美）

鐘 幹八郎 1996 恥の感覚について 北山修（編）日本語臨床 I 恥 Pp.25-40. 星和書店

Webb, M., Heisler, D., Call, S., Chickering, S.A., & Colburn, T.A. 2007 Shame, guilt, symptoms of depression, and reported history of psychological maltreatment. *Child Abuse & Neglect*, **31**, 1143-1153.

山田剛史 2007 学生の視点を踏まえた初年次教育の展開：多様化を見据えた教育改革の組織化に向けて．島根大学生涯学習教育研究センター研究紀要, **5**, 15-29.

(2011.10.7 受稿, 2011.11.1 受理)